

# 「イスラエル建国史」

## 6 ホベベイ・ツィオン運動の展開

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人  
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。



ロスチャイルドの資金援助によって上ガリラヤに建設された開拓村

### ロスチャイルドによる支援



エドモンド・ド・ロスチャイルド

リシオン・レツィオンなど1880年代に建設された開拓村は、たちまち資金が尽きて、いずれも経営難に陥った。エドモンド・

ド・ロスチャイルドの支援がなければ、崩壊したであろう。ロスチャイルドは、1883年から1899年まで直接開拓村の面倒をみた。その間支出した金は英ポンド換算で100万ポンド。当時としては莫大な金である。

しかし、パリから派遣された監督者と開拓民の間に、摩擦が絶えなかった。監督者は、開拓民を従業員のよう扱い(開拓民は給料をもらって生活した)、農業経営を利益追求の事業

と考え、干渉した。開拓民はその干渉にいらだちを強めたが、彼らには農業経営のノウハウが欠けていた。夢はあってもそれを支える実務能力が伴っていなかった。

ホベベイ・ツィオン(「シオンを愛する人々」)の意。近代シオニスト運動の先駆けとなった組織)の運動家はロスチャイルドの開拓支援法を批判した。そのひとりアハッド・ハ・アム(本名アシェル・ギンツベルク 1856-1927)は、ユダヤ人社会の精神的文化的再生を先行すべしとする意見の持ち主であったが、ロスチャイルドの支援動機は慈善にあり、家父長的態度で助けようとするもので、開拓民の独立精神、自力向上心を奪い、民族覚醒の気運を殺ぐ、と批判した。

アハッド・ハ・アム、マックス・ノルダウ(1849-

1923)、そしてメナヘム・メンデル・ウシシュキン(1863-1941)を含むロシアのユダヤ人代表団が訪問して、コロニー管理の改善を求めると、ロスチャイルドは「私のコロニーであるから、私の好きなようにする。放ついても構わない」とつき放した。

話は前後するが、1896年7月にテオドル・ヘルツェルが面会を求めた時、ロスチャイルドは、冷ややかな態度で引見した。ヘルツェルの唱えるユダヤ人国家の再建計画は、実現不可能と考えていたのである。エレツイスラエルに大量のユダヤ人移民の吸収能力はなく、トルコ



テオドル・ヘルツェル

政府がこのような計画を容認することもない、と言った(1882年6月、トルコ政府は東欧系ユダヤ人の移住禁止の特別法を導入した。ザル法ではあったが、円滑な移民が難しくなった)。そしてロスチャイルドは、「ユダヤ人国家建設の話が知れ渡ると、世界中の反ユダヤ主義者が、これ幸いと飛びつく。とつとそっちへ行け、と追い出してしまうだろう」と述べた。

1900年、ロスチャイルドは病気になる、運転資金1,400万フランを付けて、ユダヤ人入植協会(ICA)に事業を正式に委託した。ロスチャイルドは、シオニストを地に足のついていない夢想家としか考



アハッド・ハ・アム

えなかった。開拓事業は、経営能力のある開拓村をつくるのが先決で、それを中核として広げるべきというのが、彼の考え方であった。しかし、実務レベルで押し通す限り、人々をふるい立たせ、ユダヤ人国家の再建という革命的事業に人生をかける気概は、そこからは生まれ難い。

ロスチャイルドの名誉のために付記するならば、開拓事業を他人に任せようになるまで、土地2万5,000ヘクタールを購入し、30を越える開拓村を建設ないしは支援した功績は大きい。さらに前述のように、ロスチャイルドの支援がなかったら、先駆的シオニズム運動であるホベベイ・ツィオンは、挫折したと思われる。1887年春、ロスチャイルドはシナゴグ付きの豪華ヨットで現地を訪れ、開拓村を視察した。1925年まで合計5回訪問しているが、ハ・ナデイブ・ハ・ヤドヴァア（高名なる善行者）として開拓民から歓迎された。

## 運動一本化への努力

ホベベイ・ツィオン運動家とロスチャイルドの調整役を果たしたのは、前出のシユムエル・モヒレヴァー師（1824-1898）である。ロシアのビリニュス地方（現リトアニア）のグ



19世紀イギリスの金融家  
モーゼス・モンテフィオール

ロボコイエに生まれ、ボロジンのエシバ（ユダヤ教神学校）に学んだ正統派のラビで、5年間の実務経験があり、調整力にたけた人物であった。1881～2年のポグロムで、師は移住の組織化をはかり、1882年に自らワルシャワでホベベイ・ツィオングループをつくった。

1883年、師は各地に散在するホベベイ・ツィオングループをひとつにまとめ、運動を一本化しようと考えた。ロシアのピヤリストック（現ポーランド）で小規模な会合が開かれ、理事会がつくられた。しかし、理事会は全く活動しなかった。

同年9月、プロイセンのカトヴィッツ

（現ポーランドのカトビーツェ）で、大会が開かれた。主催したのは、同市のベネイ・ベリット（契約の息子たち）協会である。しかし、カトヴィッツ市以外の出席が、ロシア2名、ルーマニア1名だけで、わびしい会合であった。そこで協会は12月にやり直しを決めた。

しかし、ロシアで運動の組織化を進める人物がいた。『自力解放』の著書レオ・ピンスカーである。ピンスカーは、準備不足を指摘して、ベネイ・ベリットにストップをかけた。



ピンスカー

1884年11月6日、カトヴィッツでホベベイ・ツィオンの大会が挙行された。代表参加32名（ロシア・ポーランド22名、ドイツ6名、英2名、仏とルーマニア各1名）で、やっと大会らしい大会になった。大会はピンスカー、モヒレヴァー師ら19名から成る中央委員会を設置した。かくして、運動は名目上統一された。

実は、この大会は10月27日に予定されていた。この日はモーゼス・モンテフィオールの100歳の誕生日にあたる。前年モンテフィオールは99歳の誕生日に開拓村6ヶ村の建設運営に多額の金を寄付し、ホベベイ・ツィオンのメンバーたちは、感謝の気持ちをこめて、誕生日に開催を予定したが、準備不足で間に合わなかった。大会はモンテフィオール協会（Agudat Montefiore）を設立して、決意を新たにす。当協会は、エрецイスラエルへの入植促進ならびに支援を目的とする。開拓村新設は、既存村の経営基盤が固まるまで延期となった。

## 運動内に存在する諸問題

ホベベイ・ツィオン運動は統一されたが、いくつも問題を抱えていた。第一は距離の問題である。中央委員会本部はオデッサ、モンテフィオール協会事務局はパリ、小委員会がワルシャ

ワである。第二は各集団の思想がばらばらであり、宗教色の強い指導者と世俗主義者との確執もあった。その例がモヒレヴァー師とピンスカーの関係である。さらに、国家再建の明確な運動方針がだせなかった。

ピンスカーは、基調演説で、エрецイスラエルでユダヤ人が農業に戻ることを強調したが、西ヨーロッパのユダヤ人社会から支援を受けるため、民族の覚醒とか政治的独立を表明しなかった（西ヨーロッパでは、ユダヤ人の市民権が認められつつあり、ユダヤ人は二重忠誠や二重国籍の問題が浮上する事態を避ける傾向があった）。

ロシア内のホベベイ・ツィオン運動は、さまざまな問題に直面しながら、1890年代には100近い集団となり、メンバーが約1万4,000人になった。会費が年に3万ルーブル、団体や企業からの寄付が2万ルーブル。年5万ルーブル程が活動資金である。しかし危機的状況を脱したわけではない。エрецイスラエルの開拓村が自立をめざして苦闘している頃、ユダヤ人解放を経たはずのフランスで、大きな事件が起きた。



エルサレムのユダヤ人（1895年）

\*滝川義人氏による『イスラエル建国史』1～4は、『イスラエル・トゥデイ』（7月をもって休刊）4～7月号に連載されています。購入ご希望の方は、お申し込みください。1冊500円（送料100円）